よだかの星

代表取締役社長 古谷周三

1 よだかの星のお話

宮沢賢治に「よだかの星」という10ページ足らずの童話がある。仲間はずれの孤独なよだかが、星になるというお話。森の頂点に君臨する鷹は、名前が似ていることで日頃からよだかが気に食わない。ついにある日、鷹はよだかに向かって名前を「市蔵」に変えよ、鳥の仲間に挨拶して回れ、さもなくば殺すぞ、と改名を強要する。これを嘆いたよだかは、夜空の星座に生まれ変わりを頼んで回るが、すげなく断られる。覚悟を決めたよだかは、生来の飛翔力で命の限り星に向かって飛び続け、そのまま絶命する。そうして星になって生まれ変わるのだ。賢治の独特の宇宙観、生命観を映したリリカルな好編である。

改名を命ずる鷹の理不尽さは読み手の胸に刺さるが、鳥の仲間に仲裁役はいなかったようだ。思うによだかの悲劇は、名は鷹に似て、その実どの鳥とも似ていないという中途半端さにあるようだ。よだかの名はその飛翔力と鳴き声が鷹に似ていることに由来するが、鷹と違って夜に活動し、鋭いくちばしや爪もない、実は美しいかわせみの兄弟であることが明かされる。

2 農協改革の議論の底流にあるもの

—中途半端さに対する批判—

今回の農協改革論議は私に、この物語を思い起こさせる。改革を迫る理不尽さの印象が似ているから、ということはある。ただ、それにしても農協への同じような批判(農業の衰退は農協のせい)が10年以上にわたり、同じような論者により繰り返されるのは何故であろうか。

ここに至り私は、農協が事業を通じて企業と同じ世界で活動し、競争していることに思いを巡らさないわけにはいかない。鷹(企業)にとっては、同じ森に棲み、似た名前と能力を持ちながら、実は異なる本質を持つよだか(協同組合)が気に食わないのだ。農協の多面的な性格は、企業の競争原理を貫徹したい論者にとっては矛盾に満ちたものに映るらしい^(注1)。確かに農協は家族・地域(友愛)と国家・行政(平等)と企業(自由)の狭間の中間帯にいる。三者の価値を共有しながら、そのどれにも特化しない。その中途半端さが攻撃的になるのだ。曰く「農業の競争・成長に特化せよ」「行政の下請けになるな」「兼業農家が日本農業をダメにした」。

しかし、このことは多分、中山間・多雨の環境下で築いてきた日本の農業が市場経済と自然資源の持続可能性との接点で営まれていることと無関係ではない。特に移行期にある今の農業は、法人から高齢者の生きがい農業まで多様な担い手の危ういバランスの上に成り立ち、全体で地域なり環境が維持されているのだ。そして成長の芽も地域の活力から育つ。「農業と地域の活力創造」は一体のテーマであり、企業的農業経営の一点突破で解決できる問題ではない。農家だけでも、国家・行政だけでも、企業だけでも支えきれない農業と地域の問題がある。

①農家だけでは市場に対応できない(個人と市場しかないことで苦しむ中国を見よ。安定した資材供給、計画的な生産、品質管理、出荷の苦勞)。

②国家・行政のルールと財政だけで地域農業は支えられない。新規就農も担い手への農地集約も農村現場での自主的な人的調整で運

営されるのだ。

③外部の企業参入についても然り。地域との調和がなければ、農村の構造問題、高齢化と担い手への円滑な移行は調整できない。

こうしてみると農協が三者の中間に位置し、多様な事業基盤と社会活動の両面を持つ組織だからこそ果たしうる役割がある。それは^(注2)ペストフによれば社会的経済部門の担う領域であり、協同組合の領域でもある。今回、農協は産業としての農業に純化すべしとの論調だが、純化すると抜け落ちる重要な価値・領域があり、人的組織である協同組合こそがそこを埋めることができるのだ。

3 農業の多様性への対応が命

この童話はもう一つ私たちに大切なことを教えてくれる。森は鷹だけで成り立っているのではないことだ。猛禽類である鷹は小動物を食い、よだかは昆虫を食い、かわせみは魚を食う。その生態系の循環が維持されなければ森は維持できない。よだかは死へ旅立つ別れに弟のかわせみを訪ねてこう言うのだ。「お前もどうしても取らなければいけない時のほかはいたずらにお魚を取らないようにして呉れ」。よだかは森のルールを知っていたのだ。多様な生き物が共生しているからこそ、変化や危機に強い森が成り立っている。鷹だけが際限なく勝ち続けることの先に待っているのは、猛禽類同士の狂宴でしかない。

このことは私たちに自然相手の農業の世界も多様性が命であることを示唆してくれる。多様な品目、多様な担い手、多様な地域にあった農業のあり方、それに対処できる選択肢を提供できる存在こそ、「農業と地域の活力創造」に欠かせない。多様な事業基盤と参加型

(注1)大泉一貫は農協を「矛盾統合体」と呼んでいる。

『農協の未来』(2014)勁草書房

(注2)ビクター・A・ペストフ(2012)「共生する社会を目指して」『農林金融』9月号

の原理を持ち、農業と地域の専門家を抱える農協にはそれができるし、求められてもいる。これは企業では代替できない機能だ。

4 示すべきモデル

こうしてみると我々の示すべきモデルは、以下の4点ではあるまいか。

①地域農業・担い手の多様性に応じた処方箋作りをリードし、②農業のプロであることの信頼を核に地域の内発的な発展を協同活動・事業で引き出し、③農地や水等、地域の自然資源を多様な関係者をまとめながら長期的に保全し、④単協・連合会の組織・機能を適切に組み合わせて新たな成長の芽を育てる。

農業と地域に責任ある組織として我々は、地域の特性に合わせた手触り感ある農業と地域の具体的ビジョンを世に示す時である。そのためには組織と事業の幅広い選択肢を持たねばならない。これが「農協かくあるべし」と現実を枠組みに押し込もうとする理念的批判に対して、我々協同組合だけが提示できる解である。もう理念的対立の応酬は止めにして、現実に対してしたたかでしなやかに経営していく姿勢を示さねばならない。

そのために必要な改革は躊躇してはいられない。有利販売・有利調達を再点検する。地域リーダーとして、異なる農法や新規就農者や農協卒業組の経営も間口広く受け入れてビジョンを示す。市場シグナルに敏感にビジネスを掘り起こし、地域の組織・行政・消費者とも連携してコミュニティビジネスを興し、女性や高齢者にも機会を与え、価値の地域内循環を目指す。連合会とも連携して外部の産業から技術やノウハウを活用する。農業者の教育と営農と経営指導も再構築する。連合会はそのらを全面的に支援する。

我々は「市蔵」にも星にもなるわけにはいかないのだ。

(ふるや しゅうぞう)